
Catch the eye 2016年3月

2016/3/4 分身ロボット
(金)

今日もよく晴れている。外は暖かそう。あつというまに3月になっていた、感。昨日袴姿の女子を地下鉄内を見た。そういう季節になった。

地下鉄車内。いつも感心しながら人々を見ている。数日前の朝、しばらく開閉しない扉のそばで座席側を縦に眺めていた。ほとんどが下を向いている。

手前から一人目の女性はFB、その隣の女性はゲーム。このゲーム女性を右サイドから見ている。その様子が異様であった。気がふれたように映るのだった。スマホを顔に近づけ、親指だけが異常に早く動く。

画面に吸い寄せられるように凝視した目が時々ちらっと瞬く。放心したように繰り返す動作。目を上げるとがない。もし危険な人がそばに来てわからない。気づくのが遅くなり、身を守ることができるだろうか。

『さっさと歩きなさい』。外を歩く時、女子は特にそう躡られた。夜道や繁華街ではそういう気持ちで小走りほどの速さで歩いた。いま、さっさと歩いている人自体を見るのは稀。

動作が緩慢。回りに気がまわらない。手元サイズの分身ロボットの開発も進んでいるようであるから、そのうち人間はハードウェア中心になり、ソフトウェアは分身ロボットに頼ることになるのではないか。

人間と分身ロボットが一体化。それも現実味ありと思う今日この頃。

2016/3/19 8年前の連載記事
(土)

昨夕から今朝にかけてよく降った。暖かい雨だった。すでに桜の話題がのぼり、まもなく開花の予報。明日は春分、いよいよ春本番。

昨年末から何かしら慌しく過ごした。そろそろ一段落しそうで、残務や片付けの予定を手帳に書き込む。

新聞もまとめて読むことが多かった。人工知能の話題は連日続いている。ここにきて、思いだす、あの連載。

『やさしい経済学—21世紀と文明—デジタル文明の行方』。日経の連載。切抜きの日付を見てびっくり、もう8年も前になる。

連載の最終回で筆者の「坂村健」が結んだ文章は次のようなものだった。超専門家がそんな風に締めくくらないで、と思ったのだった。

「脳インターフェースと仮想空間技術は人間にとっての物質世界の価値を大きく減らすだろう。人工知能ができれば文明の運営を機械にまかせ人間の関与は欲求を出すだけまでに縮小できる。そして、精神のダウンロードにより、その欲求を出す主体自体が、完全情報化するに違いない。

資源や場所の縛りがなく、すべての欲求が満たされる世界—その時、世界は一つの巨大なプログラムに還元される。停止条件もなく入出力もないこの閉じたプログラムが文明の最終形態だとしたら我々はどこへ行くのだろうか」。

国際シンポジウム『ロボットと未来社会』は1997年の開催。それから20年、世界トップの囲碁棋士に4勝1敗で勝った人工知能。

10年後でさえ、仕事と暮らしは想像を絶する状況のはず。「我々はどこへ行くのだろうか」と結ぶ気持ちがわかる気のする昨今。

2016/3/21 (月)

桃咲く

天満橋までいく途中、大阪城公園桃林



2016/3/23 (水)

春の満月

